

タイトル「よその火」

著者 柿ノ木コジロー

元にした作品のタイトル なし

特記事項 特になし

あらすじ 近所で火事が出た。少年は家族と駆け付ける、よその火を見るために。そこには同じような連中がひしめいていた。

本編の文字数 3192文字

以下本文————

——かんかんかんかんかん

けたたましく鳴る半鐘、すぐ近くだ。少年は明け方の布団から跳ね起きて外に飛び出す。兄も弟も妹も跳ね起きて、留守番していた婆あも外の便所から飛び出して小路を駆け出していた。婆あの腰巻に斜めに絡まった着物の脇、落とし損ねたらしい便所の紙——くしゃくしゃに丸めてから開いて使っている四ツ切の新聞紙がひらめいている。

サイレンの咆哮をあげて消防車が向こうの通りを一台、また一台、そして続いて三台。少年は西の空を見上げる。

黒い煙、隣のおやじが同じように小走りになって続く。

「まずいな、風がこっちに吹いてら」

血走った目でそう言いながらも語尾に笑いを含んでいる。

たどり着いた家は既に半分以上真っ赤な炎に舐められている。ぼりん、とガラスが割れたと同時に黒い梁が地響きを立てて落ち、火の粉が舞う。わあい、と幼い子が手を叩いてすぐに母親にはたかれた。

まだ無事らしい玄関から大きな段ボール箱を抱えた男が、へっぴり腰で後退りのまま大慌てで出てきた。重そうな荷物だが、必死の形相だ。家の主人らしい、男はすぐ玄関先にその箱を落とすと、また中に戻った。手伝おうか、と言うものはいない、遠巻きにして眺めるだけだ。男はまたへっぴり腰で別の箱を抱えて出てきたが、急に天井が落ちる音に飛び上がりそれを取り落とした。たたきに当たった箱の角がひしゃげ、転がった時に開いたそれから古い札束が飛

び出した。

奥の方から助けてえ、と女の声がした。助けて、と言っているのかどうかも判然としない、獣のうめきにも近い、しかし多分人のことばだろう、続けてまた、だずげえ、と聞こえた。

しかし男はかがんで散らばった札束を拾い集めようとした、それからつかの間迷ってまた中に飛び込んだ。すぐにまた、他の箱を抱えて戻ってくる。そしてまた中へ。人垣はわずかに玄関に寄りつつある。少年も押されて一步進む。

その後、男はなかなか帰ってこない、奥からまた獣のうめきに似た声が響く。

「あれは身重だぞ」誰かがつぶやく。しかし中へは入らない。

「いい女なんだよな」他の誰かも言うがやはり動こうとはしない。

その時、何を合図にか、わっと人々が前に動いた。落ちている札束に群がったのだ。気づいた他の連中は既に出ていた箱を引きむしって開けようとする。札束の帯が破れ、火事場の突風にあおられた札がぶわりと渦を巻いて吹き上がった。群衆はいっせいに怒号をあげ、両手を挙げる。

「たにし」

つないでいたはずの手が空いていた。聞きなれた弟の叫びがどんどん離れていく。たにしとは何だろう、そう思いながらも少年は弟の名を何度も叫び、たにしと叫びながら去っていく方を透かし見る、自分ももしかしたら、たにし、と叫んでいるのかも、そう感じているが今度はもっと遠くから兄の声も響いているのによりやく気付いた。これは言葉は全く聴き取れず、ただ、おうおうおうと呻いているようだった。膝に何かがしがみついて振り払おうとしたが、妹がおびえた顔で見上げるのとよりやく目が合い、身体を引き寄せた。

消防隊が駆け付け、みんな下がってください、というが中にまだ人が、と叫ぶ声、荷物を出す、どけ、とわめく者、前に出ようとする者に殴りかかるやつ、消防のホースが踏みつけられ、少年は押されて庭石の上に転ぶ。尖った角が額を切った感触があった。血の幕に染まる視界の先、妹が誰かに担がれて助けられたのか、と思った

とたん白い煙の吹き出し口となった縁側から中に投げ込まれ、あっという間に見えなくなった。婆あがゴイサギじみた鳴き声を上げて続いて飛び込んでいった。あっという間に尻についた紙に火がついた。

「莫迦なババアだ」三軒隣のいつも上品なお花の師匠がそう言い捨てて鼻でわらった。そのお師匠も誰かにどつかれ、よろめいた所を軽々と担がれ縁側から中に放り込まれた。まるで枯れ枝をくべるように。他に投げ込むものがないか辺りを見回す連中の目線から外れようと、少年はじりじりと脇に寄った。それでも、燃え盛る炎からは目が離せなかった。

燃え続ける家の前にぼんやりとたたずんでいると、いつの間にか近所に住んでる独り暮らしの「あんぽんたん」が脇に寄っていた。にこにここと笑ってこちらを見ている。

あんぽんたんは、いつも周りからあんぽんたんとはしか呼ばれていない。名前は誰も呼ばない。ごく普通の名前だったはずだが、少年は既に名前を忘れていて、ただ、皆が呼ぶようにあんぽんたんとはしか呼んでいない。彼が本当にあんぽんたんなのか、それとも周りが全てあんぽんたんなのだがそれに気づかず、唯一まともなニンゲンをそう呼んでいるのかすら分からない。

「あんぽんたんも、きてたんか」

それには答えず、あんぽんたんはうれしそうに言った。

「あったけえな、ここだと顔も腕もあそこもぽっかぽかだ」

うん、と少年は前を見たまま頷く。あんぽんたんは続ける。

「でもかなり、くせえな。こげくせえ」

うん、と彼はまたぼんやりとうなずいた。確かに、匂いはひどい。焦げ臭いだけでなく、焼けてはいけないなにかがじりじりと焼ける匂いが不意打ちをかけてたまに鼻をついた。

ごお、と何かが鳴って大きな熱い空気の塊がまともに少年たちに当たった。熱い、というより固い壁じみた空気に押され、少年は後退る。火照って今にも火を噴きそうな頬に手を当てる。その手のひらが妙に冷たく感じられた。

またもっと大きな音で、ごお、とすぐ隣が鳴ってその前に立って

いた連中、先ほどまで次の焚き木を探すようにあたりを見回していた数人はあっという間に火に包まれた。黒い影となった彼らはゆっくりと後退り、みるみるうちに小さな消し炭になって朱色の風にあおられて散ってしまった。

「おれたち、燃やされずにすんだな」

あんぽんたんが横目で少年を見た、その時急に石に当てた頭がはげしく痛み出した。

がんと痛む額にやった手にごわついた紙切れが触れる。引きむしってみると、旧い一万円札だった。どこからか飛んできて、流れる血をふさいでくれたようだ。

「よその火って、おもしれえ」

あんぽんたんが歌うように言った。少年を見て、続けて言う。鼻の穴から芋虫の色をした涙垂れが小指の先ほど落ちかかっている。

「よその火だから、おもしれえ」

「えっ」

「そうさ、よその火だからよ」

「どけ邪魔だ」

銀色の塊みたいな大きな連中にどん、と押しのけられ、あんぽんたんとふたり、またよろけて今度は後ろのどぶ板を踏み抜いて泥の中に仰向けに落ちた。少し時が飛んだ。

意識が戻った時には落雷に遭ったかのように頭の中が激しく轟き渡っていた。黒い泥が妙に冷たい。脇の長々と伸びた影に気づき透かし見る。あんぽんたんだった。うつ伏せに落ちて身じろぎひとつしない。あんなにあったけえ、と言ったのに冷めるぞ、と揺り起こしたがみずからはぴくりとも動こうとしなかった。

放水開始、と遠くから聴こえた時、近くの誰かが明らかに、ああ、と残念そうな声を漏らした。

帰ってきた記憶はなかったが、気づいたら少年は夜中、薄く小汚い布団の中にいた。

妹はどうぜんのように脇に、婆あのしょぼくれた乳房をくわえて丸くなっていた。妹も、婆あも、途中ではぐれた兄と弟も、すでに

布団のかたまりとなって、しん、としていた。

少年はそっと、腕を口元に近づける。産毛は焦げて丸まり、所々火ぶくれになりかかっている。そして、騒乱に燻された、どこか懐かしい熱い匂いがした。身体からまだ、熱が抜けていなかった。

あったけえな、と歌うようなあんぽんたんの声がよみがえった。

少年は口の中で小さく、あったけえな、とつぶやいて反対側を向いて身を丸めた。

風に乗って飛んできた小さな火種の欠片が、少年の家の屋根の隙間に入り込み、橙色のかすかな光を脈動させながら、そのままいぶり続けているのを、よその火をまた生み出そうとしているのを、少年も家族たちもまだ知らない。